

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ティルズオブエクシリア2（転生者が望んだ世界）

【作者名】

豆鉄砲X

【あらすじ】

あれ？「ここどこ？」

彼女が目を覚ましたのは何も無い真っ白な空間だった。そこには白い髭のおじさんがいた。どうやら神様らしい。その神様の性で死んでしまいお詫びに好きな世界へ転生してくれると言う。何ともテンプレな展開ではあるがこれを気に彼女は自分の好きなゲームの世界をハッピーエンドにしたいよつで、それを目指すためにその世界を旅することになる……

神様の転生なんてテンプレだよね？

「えーと……」

気付いたら私は真っ白な空間にいた

「スマン、僕のミスじゃー」

目の前には立派な長い白髭のおじさんがいた

「貴方は？」

「僕は神じゃ」

「神って……神様？」

「うむー」

一体どんな状況？ 確か私は車に跳ねられて……ってことはここは天国？

神「まあ、そんなところじゃー」

「わざわざ私を呼んだってことは私に用があるんだよね？」

神「察しがいいのう。実はそなたが死んだのは僕のミスなのじゃ」

「ちつきも言ってたけどどうして？」

神「実は大切な資料を落としてしまった？ そのうちの一枚だけ運

悪く破れてしまって、それが君のだったってことだよ」

神様……貴方何してるんですか……

神「だからお詫びに好きな世界に転生してあげるといふことじゃ！
勿論特典はつけるぞ？」

何かテンプレな展開だけど……まあいいや！転生するならあの世界だよ

「だったら『エクシリア2』の世界がいいな！」

あのゲームは好きだけどあまりにもルドガーがかわいそ過ぎるからどうにかしてあげたいんだよね……

神「わかった。では何かしらの特典をつけるが望みの者はあるかの？」

うーん……これといって考えてはいないんだけど……そっだ！

「私にも骸殻能力をつけてくれる？」

ストーリーが少し変わっちゃうかもだけど、私も憧れてたんだよね

神「お安いご用じゃ！他にはあるかの？」

「えーと……取り敢えず運動能力とかをうんとあげて欲しいのとエレ
ンピオス人だけと精霊術を使えるようにして欲しいかな？」

神「それだけでいいのかい？よければもう少しくらい着けてやって

も……」

「いや、これで充分ですよ」

流石にこれ以上チートにしたくないし、精霊術はなんか使ってみたかっただけだしね

神「了解。じゃあ早速送るが準備はいいかい？」

「その前に聞きたいんだけど、いつ頃に送るつもりなの？」

神「ルドガーがアスコルド行き of 電車に乗った辺りじゃの」

「了解 じゃあ神様お願いね」

神「任せなさい！」

さてと、全力でルドガー一味を助けよう！出来ればミラさんや兄さんも助けたいな……

目指せハッピーエンドだね

少しオリ主紹介を……

名前は次回

性別 女性

趣味 料理とゲーム

好きなもの 猫

嫌いなもの 虫、虫、兎に角虫

年齢 17

彼女は高校二年生であったが、下校時に突然車に跳ねられて死んでしまった。性格は明るくて誰にも気軽に接することが出来るが、ちょぴり天然？

大の猫好きで猫を見ると直ぐに撫でてしまう癖がある。しかし虫だけはどうしてもダメで、近くを横切ったりした瞬間全速力で逃げてしまう。

容姿は、青いセミロングの髪に茶色い大きな瞳。年齢の割には意外と幼く見える。(中学一年生くらい)

何故か自分の胸が小さいのを気にしてい「……………うわぁ　！何をする、やめ「(ピチューン

憧れの冒険開始！

俺の名はルドガー・ウィル・クルスニク。今日からこの駅にて料理人として働く……筈だったんだがな

「この子が君に妙な事をされたと言っているんだが……」

ルド「ええ!？」

「ちょっと来てもらおうか？」

ルド「違う！あの子供が嘘をついたんだ！」

「待て！逃げる気か！」

「(い)・め・ん・ね)」

子供は口の動きだけで俺にそう言つと、早々と電車の中に入っていった。こづなつたら！

ルド「くっくっ」

俺は強引に駅員の手を振りほどいた

「ぐっくっ!?! 貴様」

すると駅員の頬に当たってしまった

ルド「あっ……くっく……」

やってしまった……そう思った矢先だった

ドンッ

「なんだ!？」

近くにあった謎の荷物爆発し、人が数人現れた。そいつらは銃の様なものを撃ちまくると、そのまま列車の中に次々と乗り込んでいった

(くっ、今のうちに逃げなければ……ここは危険すぎる!)

早くこの場から立ち去ろうとした。しかし……

「きゃああああああああ!!!!」

「!？」

さっきの少女の声だ。まさかさっきの集団に教わってしまったのか？

「くっ……仕方がない!」

俺は何も考えずに列車の中へと乗り込んだ……

「ふっふ……」

ふう、ついたついた！ここは見た感じだとトリグラフ中央駅だね？

「ルドガーたちはどこかな？」

私がルドガーを探していると人が集まっているのが見えた

「あの集まりは……よし！」

多分ルドガーの不幸その1だろうと思い、そこに向かった

「ちょっとすみませんね。」

私は人だかりを掻き分けながら現場へと進んでいった

「あつ、やっぱりルドガー君の不幸その1だった」

予想は的中し、ルドガーはエルに痴漢扱いにされて捕まりそうになってた。相変わらず貧乏神でも着いてるんじゃないのと思うくらいだ

ドンッ

あれはアルクノアだね？ってことはここからルドガー君の不幸物語が始まるのか……

「あつ、私武器持ってなかった!？」

そうだー！私まだ武器持ってないじゃん！流石にこのままじゃ闘えないよー……

「ぎんごよひ……」

そんなことを思っていると、少し離れたところに光っているものを見つけた

「あれは何だろう？」

気になって近づいてみたところ、一本の槍が置いてあった

「何でこんなところに槍が？でも取り敢えずこれで闘えるね」

闘えれば何でもいいやと思い、その槍を片手に列車の中へと入っていった

ルド「っ!？」

列車に乗り込んだ瞬間乗客と思われし人たちの死体が転がっていた

ルド「これは……酷いな……」

思わず吐いてしまいそうな光景だった。そして少し歩くと……

「しぎ〜」

ルド「ルル!? どうしてニニニ!?」

飼い猫であるルルが先ほどの少女と一緒に隠れていた

「この時計は……」

少女の首には俺の兄さんが持っている時計と同じ物が掛けてあった。それを触ろうとした瞬間……

ルド「っ!?」

時計が消えた。何故かは分からないが薄い光を放って消えたのだ

「!? 不味い!?」

気付いたら、先ほどの連中の仲間らしき人物がゆっくりと近付いてきた

(どうする!? 相手はまだ気付いていないようだが……闘つか? それとも降伏するか?)

「誰だ!?」

(ばれた!? 仕方がない……こうなったら!)

少しでも抵抗するか、と考えたとき、何者かが横を通り過ぎていった

「瞬間銃」

通り過ぎて過ぎていったのは女性のようで、一本の槍を素早く突き

刺していた

「!?!」

もちろんそんなのに耐えられる筈もなく、その場に倒れた。どうやらこの子に助けられたようだ

ふう、何とか間に合ったみたいだね！

「その君、大丈夫？」

怪しまれるといけないから知らないふりしないかね？

ルド「あつ、うん。こっちは大丈夫だ。ありがとう」

エル「う……んっ？」

あつ、エルちゃん起きたみたいだね？

エル「ここは？」

ルド「列車の中だよ。お前はここで気絶してたんだ」

エル「ふーん。あつ！さっきの猫！」

「猫!?!」

ルド「ど、どうした?」

ルル「にゃ〜」

「かわいい」「のちよつと出たお腹もい〜!」

やっぱりルルはかわいい。これ常識だよ!

ルド「あ、あの〜」

あ、いつもの癖が……

「じめんね、「こ」は危ないから早く降りた方が……」

ルドガーを列車から降りさせようとしたら列車が駅を出発してしまつた。これでルドガーの不幸な運命は不可避になつちやた……

エル「お姉さんうしろー!」

「またきちやた?」

倒そうと思ひ構えたが、突然アルクノアの人が倒れた

「あれ?」

つと、ジュードさん来たよ! エクシリア2の中でもかなり好きなキャラだから嬉しい!

ジユ「君はあの時の？」

「流石はD「マティス。わが社の護衛にも見習わせたいよ」

あれはビズリーさん！怖そうな雰囲気を持つてるけど意外といい人なんだよね？

ジユ「貴方もご無事でしたか」

ビズ「そちらの少女も中々のものだ。お嬢さん、お名前は？」

「人に名前を訪ねるときは、まず自分から名乗るものだよ？」

ちょっとロイドさんの真似してみたかったんだけど……

ビズ「はっはっは！こいつは失礼。私はビズリー・カルシ・バクー。クランスピア社の社長だよ」

「私は……」

前世の名前だと面白くないなあ………なにか新しく名前つけよ！

「ルシエル！ルシエル・ティルス！」

ビズ「ルシエル君か。いい名だ。そちらの少年は？」

ルド「ルドガー。ルドガー・ウィル・クルスニクです」

ビズ「クルスニク………ユリウスの身内か？」

ジユ「ルドガー………クルスニク？」

ジュードが少し疑問に思っている。まあ、一年前にあった危険な兵器と同じ名前だからね。世間に知られていないはずなので話さないけど……

「ルドガー様はユリウス室長の弟のようです。……母親は違うようですが」

ルド「ん？」

ビズリーさんの秘書であるヴェルさんが意味深な事を言うのに対し、ルドガーは疑問符を浮かべていた。そりゃそうだよな？未プレイな人もいるかもだから言わないけどね

ガタンッ

ん？何だろう？

ビズ「始めたな？アルクノア共」

ジュー「アルクノア!？」

ルド「なっ!？」

ああ……このままだと事故って全員病院送りだね？

ルシ「このままだと列車が事故っちゃっけど……どうするの？ルドガー君？」

ルド「……列車を止める！」

エル「できるの？ほんとに？どうやって？」

エルちゃん「ルドガーの袖を引っ張りながら聞く」

ジユ「先頭車両を抑えられれば……」

ビズ「出来るのであれば、相応の報酬を出そう」

報酬と言うより、悲劇しか与えられないけどね……

ジユ「僕も行くよ。……責任があるんだ」

ルド「うん」

ルシ「あっ！じゃあ私も行くよ！」

ルド「えっ？」

ジユ「ダメだよ！相手はテロリストなんだ！女の子を連れていくなんて……」

ルシ「むー！私は普通の女の子じゃないもん！」

ちよっと拗ねたように言う。ジユードならそう言うって思ってたけどね

ビズ「ふふふ、連れていってあげなさい。少なくとも、彼女は只の少女ではないよ」

さっすがビズリー社長！話がわかるー

ジユ「……仕方無いね」

渋々納得してくれたようだ。ふっふっふ、私には神様から貰ったチート能力があるから大丈夫なのだ！

ルシ「あはっ ありがとね エーと……」

ジユ「僕はジユード・マティス。宜しくね、ルドガー、ルシエルさん」

ルド「ああ！こちらこそよろしく」

ルシ「よろしく だけどルシエルでもいいんだけど、折角ならルシって呼んで欲しいかな？」

ジユ「わかった、これからそうするよ。ルシィ」

ルシ「うむ！よろしい」

エル「この先に行くならこれ持ってってー！」

ルド「ん？これは？」

エルちゃんがルドガー君に包んである何かを渡した。それは一組の双剣だった

エル「パパが使ってた剣！後で絶対返してよ？」

返しません。そして売ることも可能。……安いけど

ルド「わかった、ありがたく使わせてもらっつよ」

ルドガー君はそう言い、剣を逆手で構えた。どうやらしっくりきたようだ

ジュ「じゃあ行こう!」

ルド「ああ!」

ルシ「オーケー!」

ここから本格的に始まるね!さあて、しっかりとサポートしますか

やっぱり違和感あるんだね

ルシ「三散華」！

素早い槍による三連突きを繰り出す。やっぱり技名を言いながら攻撃するのは気持ちいい！

ジュ「魔人拳」！

拳を振り上げ衝撃波を繰り出す。これはティルズの基本技だね

ルド「鳴時雨」！

数回斬りつけたあと、回し蹴りで蹴り飛ばす。普通は一回で死ぬよ

？

ルシ「大分進んできたね？」

ジュ「うん、この先が先頭車両だね」

ルド「何かあるか分からないが、注意していこう」

ジュ「だったら僕が先に行くよ」

ルド「えっ？」

ジュ「大丈夫だよ、こつこつうのには馴れてるんだ。……本業は医学者なんだけど」

闘う医学者はいないと思うけどね？

ドンッ

ジュ「急ごう！」

ルシ「了解！」

ルド「ああ！」

「彼らは実に興味深い。特にあのルシエルと言う少女。ただ者ではないな

ヴェ「どうしますか？彼らを追いかけますか？」

ビズ「構わん。今は放置しておけ」

先ずは……器を量らねばならないからな

エル「あっ!?時計がない!？」

ビズ「お嬢さん、動くと危ないよ」

「エル「危なくても大事なの！カナンの地に行くお守りなんだから
!」

っ!?カナンの地だと？」

ビズ「ふっ、面白いことになってきたじゃないか」

俺とルシイは、ジュードを先頭についていくことにした。そこで見たのは……

ルド「なっ!? 兄さん!？」

ユリ「っ!? ルドガー……」

そこにいたのは、俺の唯一の兄であるユリウス・ウィル・クルスニクだった

ルド「兄さん……今は?」

ユリ「……お前には関係ない」

ルド「兄さん……」

沈黙が続いた……そして、その沈黙を破ったのは

ビズ「いい弟を持ったな、ユリウス」

ビズリー社長だった

ユリ「……戯れは止めてください、社長」

ビズ「こんな優秀な弟がいたなんてな。余程大切に育ててきたんだな」

ユリ「っ!?当然だろっ!」

突然兄さんがビズリー社長に斬りかかったが、社長はなんなくそれをかわす

ビズ「いいのか?弟の前で」

ユリ「くっ!?」

兄さんは少し苦い顔をすると、バック中で距離をとり、懐にあった時計を前にかざした

エル「パパの時計……!?」

ユリ「なっ!?」

ビズ「ん!?」

少女の所に消えた筈の時計が現れた。気のせいか、兄さんとビズリー社長だけがその時計に反応した

ジュ「っ!?危ない!」

バンツ!!

アルクノア兵が現れて、少女とビズリー社長に向かって銃を発砲した

ルド「くっ！」

俺は少女を守った、社長の方はルシィが守ってくれたようだ

ビズ「……………ほう？」

ルシ「大丈夫ですか？ビズリー社長」

ビズ「ああ、君のお陰でな」

アルクノア兵が数発銃を発砲してきた。ここは危険だと判断し、少女の手を引っ張って連れていこうとした

ルド「こっちだ！逃げるぞ！」

「我々は認めない…リーゼ・マクシアとの融和など！」

発砲した弾丸の一つが、兄さんの時計に当たり、弾かれたその時計は少女の時計と重なった

ルド「っ!？」

その瞬間、俺の中に何かが流れ込んで来るような感覚に襲われた

ルド「うおおおおおおおおお!!!」

ルシ「……………」

気が付いたらさっきの兄さんの様な妙な姿になっていた。何かなんだか分からなくなり、いつの間にか持っていた変わった形状の槍を投合した

「ぐあぁー！」

その槍はアルクノア兵に当たり、俺たちは謎の違和感に呑み込まれた

ルシ「っとと」

どうやら凱殻にはなれたみたいだね？それにここが分史世界かぁ！
やっぱり違和感はあるね。見た目は余り変わらないけど……

ジュ「今のは一体……」

エル「……………」

エルちゃんが私の後ろに回り込んだじゃった

ジュ「えっと……………」

エル「エルはエル……。エル・メル・マータ」

ジユ「エル？心配ないよ」

エル「心配ある！その人も！時計も変になったし！」

ルド「……………」

ルシ「大丈夫だよ、エル。ルドガーはこの猫ちゃんの飼い主なんだから！」

ルル「ナア」

エル「……………本当？」

ルシ「ほんとほんと　猫ちゃんの飼い主に悪い人はいないよ！私を信じて！」

エル「……………わかった、信じる…！」

うん！エルちゃんにはやっぱり笑顔が似合うね　後半はあんまり笑わないしね？

ジユ「さっきのあの力……………精霊の力に似てたな……………」

エル「セーレー？」

ルシ「こことは違う、別の世界にいる存在だよ」

ジユ「うん、僕たちの住んでいる世界には精霊がたくさんいるんだ」

エル「あんなに怖いのがたくさん!?!」

ジユ「怖くないよ。精霊は僕たちの生活を支えてくれる、大切な存在なんだ」

ルシ「エルからすると、エルのパパみたいな存在かな？」

エル「パパみたいなの？」

ルシ「うん。だから守らないといけないんだ、私たちの手で」

エル「うん、わかった！」

エルが納得してくれたようで良かった！

エル「また来た！」

一人のアルクノア兵がやって来たが、背後にいるものに倒された

「ヴェラント頭取！こっちはです！」

「お見事、ノヴァ君。警備の者にも見習わせたよ」

ジユ「この台詞……」

ルシ「さっきのビズリー社長の台詞に似てるね」

ルド「なっ!? ノヴァ!?!」

ノヴ「ルドガー!? どうしてここに……」

ルド「お前!?! どうして……」

エル「知り合い？」

ノヴ「同級生だよ」

つと、列車のスピードが早くなつたね？

ジユ「状況はわかりますか？」

ノヴ「白い服の男が乗客を次々と殺して行って……」

この時毎回思うんだけど、ルドガー君の同級生なら、ユリウスさんの事くらい知ってるのでは？と思うのだが、この分史では知らないのかなあ？

ルド「っ!? 兄さんを探そう！」

ジユ「ユリウスさんなら何か知ってるかもしれないしね？」

出発しようとしたら、エルに呼び止められた

エル「私も行く！」

ジユ「ダメだよ、危ない！」

エル「エルはこの列車でカナンの地に行かなきゃダメなの！」

ジユ「カナンの地って、あの？」

エル「知ってるの!? 何処にあるかも!？」

ジユ「古文書で読んだだけだからなあ……………」

エル「こもんじよかあ……………」

……………この子、古文書が何かわかってるのかなあ？

ルド「カナンの地ってなんだ？」

ジユ「ある神話に出てくる伝説の場所なんだけど……………詳しいことは後で話すね？」

ルド「ああ、わかった」

ルシ「連れてってあげたら？危なくなったら私やルドガー君が助けるしねえ、ルドガー君！」

ルド「何故俺にふる!？」

ルシ「女の子を助けるのが男の子の役目でしょ？だったら文句言わない！」

ルド「はあ……………わかったよ。全く、笑顔と違って案外強気な性格なんだな」

ルシ「常に明るく強気に！それが私のモットー！」

エル「なんかかつこいい！」

ジユ「ルシイさんがそこまで言うなら……………でも危なくなったら」

エル「逃げるのは得意！」

そう言いエルちゃんは椅子の後ろに隠れた。大丈夫そうだね！この子はかなり肝据わってるし

エル「ちゃんとエルを守ってよね？」

ルシ「りよーかい！」

ルド「はいはい……」

再び先頭車両を目指して出発！

時歪の因子破壊!

私たちはアルクノア兵を倒しながら先へと進んだ

ルシ「エルちゃんはどこから来たの?」

エル「分かんない……トリグラフ行きって荷物の中にかくれたらいつの間にかここに……」

ルシ「そうだったんだ……大変だったね」

エル「大丈夫だよ!エルはつよいからね!」

えっへん!っと、エルちゃんは胸を張る

ジユ「エルって……迷子だよね?」

ルド「多分な。危なっかしくて放っておけないよ」

エル「……構ってなんて頼んでないですよーだ」

ルド「はっ?」

エル「何でもないですー!」

ルシ「ルドガー君……」

ルド「何その目!?俺が悪いの!?!」

全く……子供の気持ちくらい察しよっよ

ジュ「ははは……」

私たちがそんな会話をしていると、先頭車両までたどり着いた

ルド「兄さん！」

ユリ「……ルドガー」

ルド「何が起こっているのか教えてくれ！」

ユリ「……お前が知る必要はない」

ルド「どうして!？」

ユリ「必要ないと……言っただろう！」

突然ユリウスさんが私たちを蹴り飛ばそうとした。でも……

ルシ「危ない危ない……」

私が槍でユリウスさんを受け止めた

ユリ「……誰だお前は？」

ルシ「“今の”貴方には関係ないよ」

ユリ「……ほっ？」

ルド「ルシィー！」

ルシ「私は大丈夫 ルドガー君はさっきの力使える？」

ルド「えっ？わ、分からない」

ルシ「取り敢えず私はこの人の注意を引くからその際に……」

ルドガー君とアイコンタクトをとると、ルドガー君は頷いてくれた

ユリ「ハア！」

ルシ「おっと！急に危ないよ！」

ユリウスさんが斬りかかってきたので、私はバックステップで避けた

ユリ「……………」

ルシ「無言？ちょっとは会話しようよ！」

大体分かってたけど……

ジュ「僕も参戦するよ！」

ルシ「ありがと！ジュード君！」

ユリ「“鳴時雨”！」

やっぱり兄弟だね？同じ技使ってきたよ

ルシ「“瞬迅槍”！」

私は素早く槍を突き刺して後ろに回った

ユリ「うぐっ!？」

ジュー「掌底破」!

ユリウスさんが怯んだところに透かさずジュード君が力を込めた一撃を与える

ユリ「ぐぁ!？」

貯まらずユリウスさんは膝をついた

「なっ!？」……「これは」

ノヴ「酷い……」

さっきの二人がやって来た

「じいっ……うちの社員を!？おい！早く殺せ!」

ルド「兄さんを……殺す？俺には出来ない!」

ユリ「お前は……甘いな……だから!」

ユリウスさんは自分の剣を一本投げた

「ぐっ……」

ノヴ「あっ……」

後ろの二人に刺さり、ユリウスさんは直ぐ様もう一本の剣をルドガーに突き付ける

ユリ「……………来るなと言っただんだ」

ルド「くっ！うおおおおおおおおお!!!」

ルドガー君は骸殻を発動させて、ユリウスさんに槍を突き刺した

ユリ「うっ……………グハッ！」

ユリウスさんは吐血し、体内からは歯車の用な物が出てきた

ルシ「あれが時歪の因子……………」

ジュ「駄目だ！ブレーキが壊されて……………!？」

暫くすると、時歪の因子（タイムファクター）が破壊された

『うあああああああああ!!!!!!』

そして私たちは再び違和感に呑み込まれた……………

掛け合い台詞

ルシイ×ルドガー×エル

ルシ「まあ、こんなもんかな？」

エル「ルシイすごい！」

ルシ「ふふうん！スゴいでしょ」

エル「ルドガーも頑張つてよね！」

ルド「あ、ああ………」

ルシイ×ジユード

ジユ「呼吸もピッタリだったね！」

ルシ「当たり前だよ！背中任せたよ！」

ジユ「ふふ、了解！」

ルシイ×分史ミラ

ルシ「流石の腕だね！」

ミラ「当然よ！私はマクスウェルなのよ？」

ルシイ×分史ミラ×エル

エル「ミラって胸大きいよね？邪魔じゃないの？」

ミラ「な、何言ってるのよ!?そんな訳ないでしょ!？」

ルシ「……………チツ」

ルシイ×正史ミラ

ルシ「流石の腕だね！」

ミラ「ルシイも素晴らしい腕だったぞ？」

ルシ「あはっ それは光栄だね！」

ルシイ×アルヴィン

ルシ「アルヴィンって銃の使い方上手だね！」

アル「まあね」

ルシ「でもミスって誤射とかしないでね？」

アル「信用ねえな……………」

ルシイ×エリーゼ

エリ「ハイタッチですよ！ルシイ！」

ルシ「うん！ハイタッチー！」

ティポ「僕たち仲良し3人組ー！」

ルシイ×レイア

レイ「ルシイ！あれやる！」

ルシ「りょーかい！」

『今日もホントに……お疲レイアー！』

レイ「うーん！やっぱりこれだねー！」

ルシ「息ピツタリー！」

ルシイ×ローエン

ルシ「やっぱりローエンの演奏は良いねえ」

ロー「ルシイさんも中々の物でしたよ」

ルシ「ローエンにそう言われると嬉しいな」

ルシイ×ガイアス

ガイ「いい腕だな、ルシイ」

ルシ「王様にそう言われると嬉しいねえ」

ガイ「いつか手合わせを願いたいものだな」

ルシ「……それは勘弁願いたいかな？」

ルシイ×ミュゼ

ルシ「ミュゼってやっぱり強いね」

ミュ「ミラのお姉ちゃんだもの！当然よ」

ルシ「でもあんまり似てないよね？」

ミュ「ルシイったら酷いわね」

ルシイ×エル

エル「ルシイって何でそんなに強いのか？」

ルシ「色々あったんだよね」

エル「なにになに!? 教えてー!？」

ルシ「内緒だよー！」

エル「えー！」

骸殻勝利時1

ルシ「ふう、やっぱり骸殻は強いね！」

骸殻勝利時 2

ルシ「これが私の骸殻の力だよ！」

ルシイ×ルドガー（骸殻）

ルシ「2人の骸殻があれば誰にも負けないよ！」

ルド「ああ！俺たちで運命を切り開こう！」

闘技場（ルシイのみ）

ルシ「私たちは最強タッグだね！」

辛勝時 1

ルシ「はあ……はあ……流石にヤバかったかもね」

辛勝時 2

ルシ「これ以上は……不味いかもね……」

楽勝時 1

ルシ「まだまだ行けるよ！」

楽勝時 2

ルシ「この調子でどんどん行こう！」

ルシイ×ルドガー（双剣）

ルシ「ルドガー君の動きって速いね」

ルド「ふっ、それほどでもない！」

ルシ「でもいつかミスしそうだけどね？」

ルド「……………」

ルシイ×ルドガー（双銃）

ルシ「ルドガー君器用だね！」

ルド「ふふん！（ドヤア）」

ルシ「アルヴィンみたいにミスしないでね？」

ルド「……………」

ルシイ×ルドガー（ハンマー）

ルシ「ルドガー君力持ちー！」

ルド「男として当然だな！」

ルシ「じゃあ危なくなったら助けてよ？」

ルド「お前の方が強いだろ!?!」

やっぱりこうなる運命なんだね

ルド「っ!?……………」

気が付いた時には知らない一室のソファア-の上で寝ていた

「いやあゝ、物騒だねえゝ」

ルド「……………あんたは？」

すぐそばにある丸椅子には派手な赤い服をきた男がニユ-スを見ながら呟いていた

「君たちの命の恩人。それだけ覚えてくれればO・K」

ルド「……………」

命の恩人?そう言えば俺たちは列車に乗ってて…………

ルド「そうだ!?ルシィたちは!？」

ルシ「どこだよ？」

ルド「うわあ!？」

突然隣のソファア-からヒョコツと顔を出してきた

ルド「脅かすなよ……………」

ルシ「ごめんごめん、そんなつもりじゃ無かったんだけどね?」

全く……ルシイは何を考えてるかわかんないな

ルドガー君を驚かしちゃった。まあいいや、これからルドガー君の不幸その2が始まるけどここまで来たなら避けられないね

ルド「？これは……兄さんの時計？」

エル「う……ん？」

あ、エルちゃん起きた

エル「あっ!? パパの時計！ それ返してよー！」

ルド「これは兄さんのだ！」

エル「ちーがーうー！ パパがエルにくれたのだってばー！」

あっ、ルドガー君が時計をポケットにしまった

エル「エルの時計とったー！ どろぼー！ どろぼー！ どろぼー!!」

「お取り込み中のところ悪いけど、2人合わせて1500万ガルドね
」?」

ルド「なっ!？」

相変わらず酷い額だね

「治療費だよ、君たちの命の値段」

エル「エル……そんなお金持ってない……」

「……稼ぐ気さえあれば、いくらでも稼ぐ手段はあるんだよ。大人だろ？が子供だろ？が……ね？」

そう言っつて、変な服を着た男……リドウさんはエルちゃんをソファーに押し付けた。端から見たらただの変態か、幼児虐待だよな？

ノヴ「すみませーん……リドウさんはこちらに……」

リド「よく来てくれたMs・ノヴァ」

ノヴァさんが扉を開けて入ってきた

ノヴ「っつてルドガー!?借金の催促っつて貴方なの!?!」

ルド「ノヴァも無事だったんだな」

ノヴ「無事っつて……なんのこと？」

ルド「えっ？」

まあ、何も知らないとそうだよな？

リド「まあそれなりに大金だ。ゆっくり考えるといい」

ルシ「どつするの？ ルドガー君」

ルド「……契約するよ」

それしか選択しないよね？

リド「O・K。賢明な判断だ」

ノヴ「……では、こちらの方にサインをしていただきます」

ノヴァさんは一枚の契約書を取り出して机の上に差し出した

ルド「……わかった」

流石に借金はどつしようもできないや。ごめんね

ジュ「ごめん、電話がきて少し長引いちゃって……って何やってるの！？」

今度はジュード君が入ってきた

リド「何って……お金が支払えないって言うからちょっとローンをね？」

ジュ「ローンって……っ!? こんな大金……」

ルシ「ごめんね？ 私もお金に関しては何も出来ないから……」

ジュ「……他にも方法があるはずだよ。他の方法を考えようよ」

リド「なら？ 君が肩代わりするかい？」

ジユ「っ!？」

リド「無理だよな〜？源霊匣の開発……上手くいってないんだもんな〜？」

ジユ「……ね？僕も手伝うから」

リド「あ〜、身内に泣きつくって手もあるな〜？例えば……兄貴にとか？」

ルド「っ!？」

ルドガー君は少し怖い顔を見ると、契約書にサインした

ジユ「ルドガー……」

ルド「……これでいいか？」

ノヴ「……契約成立です。では借金の2000万ガルドをリドウ様の口座から差し引いて……」

ルド「なっ!？」

エル「増えてる!？」

リド「おつとごめん、君たち家族の分も忘れてた」

ルル「ナア〜……」

ルルちゃんも大切な家族だけど、猫ちゃん一匹で500万は流石に

酷いと思う

リド「また困ったことがあったら何時でも言ってくれ、格安で相談に乗るよ?」

そう言い残すと、リドウさんはその場を去っていった……

ノヴ「……元氣出そ!借金をキチンと返すことが出来るようにするのが私の仕事だから!」

ルシ「私も困ったら助けてあげるね!」

ルド「ああ……ありがとう。ノヴァ、ルシイ……」

ジユ「これからどうするかを考えようか」

結局、ルドガー君は借金の運命からは逃れられないんだね……

借金はやっぱり辛いよね？

ジユ「ごめん……借金、何もしてあげられなくて……」

ルド「気にしなくていいよ、自分でも何とかやっていくから」

ルシ「これからどうする？」

エル「カナンの地！カナンの地に行つて、パパを助けてつてお願いしないと……」

カナンの地……行くと言が不幸な結果になるんだよなあ……

ルド「さっきも言っていたけどカナンの地って何だ？」

ジユ「カナンの地ってのは古くから伝わる伝説の場所で、どんな願いも一つだけ叶えてくれるって言われてるんだ」

ルド「そんな馬鹿な。所詮お伽噺だろ？」

エル「違うもん！ぜったいあるもん！」

ジユ「あながちお伽噺とは言えないと思う。最近では本当に実在するのではないかと言われるくらいになってるからね」

なんかエルちゃんがドヤ顔してる。君がドヤる場面じゃないような気がするけど……

ルド「そうなのかな？まあ、今は取り敢えず俺の家に帰るのがいいかな？」

エル「……………」

ジュ「……………エルはどうする？」

エル「えっ？」

ルド「俺たちと一緒に来るか？」

エル「!?……………でも時計返して貰ってない……………」

ルド「……………いずれ返すよ」

エル「……………わかった」

ルシ「じゃあ、先ずはお金集めだね」

ルド「えっ？」

ルシ「あれ？知らない？借金作った人はGHSで監視されてて、移動手段が制限されるんだ。借金を返していく内に解除されていくから、慌てずゆっくり返していけばいいよ」

ルド「……………マジか」

エル「大変だね、ルドガー……………」

ジュ「……………僕も手伝うよ」

ではクエストを受けに行きますか

ルシ「ここがクエスト受注場所だよ」

ルド「へえ、どんな依頼があるんだ？」

ルシ「ちょっと待ってね？ねえねえ！」

「ん？依頼を探しているのかい？」

ルシ「うん！何かいいのないかなあ？」

「そうだなあ……今あるのはこれだけだね」

陸ガニ納品、エラールホース、エラールチュンチュンの討伐か……

ルシ「じゃあ全部受ける！」

「いいのかい？わかった、受理しましたので依頼をよろしくお願いします」

ルシ「了解！」

これだけ受ければ一先ずの借金は大丈夫だね？

ルシ「受けてきたよ！」

ジュ「どんな依頼だった？」

ルシ「取り敢えずはこんなもんかな？」

エル「結構あるね？」

ルシ「分かれた方が効率いいから分担しようか？」

ジユ「そうだね。僕は数の多いエラールチュンチュンをやるから、
ルドガーはエラールホース、ルシイは陸ガニをお願い」

ルド「わかった」

ルシ「任せて！」

ジユ「また後でね！」

ジユード君はそう言い残すと先にフィールドに出ていった

ルド「俺も行くか。気を付けるよ？ルシイ」

ルシ「大丈夫だよ！私はこう見えて丈夫だから！」

エル「早く行くよ！ルドガー！」

ルドガー君もエルちゃんを追いかけるようにフィールドに出て
いった

ルシ「私もボチボチ行こうかな？」

私が外に出ようとしたとき、気になる話題が耳に入ってきた

「聞いた？エラール街道にでっかいサソリが出たんだって……」

「マジかよ……しばらくは渡れそうもないな……」

でっかいサソリ？まさかもうつ出たの？原作より早いよつな気がするけど……ちょっと注意した方がいいかな？

初の依頼とギガントなモンスター!?

くエラール街道く

ルシ「うん！陸ガニはこれで大丈夫だね！」

後は納品して報酬を貰うだけだね

ルシ「……って簡単にはいかないか……」

帰ろうとしたら魔物達に囲まれていた

ルシ「ありゃ……皆ご機嫌ななめ？」

魔物達は気が立っているのか、何故か不機嫌みただ

ルシ「原因はあれだよな？」

大分奥だけど岩の影に大きなサソリの尻尾が見える。街の人が
言ってたやつだね

ルシ「気を付けなきゃとは思っていたけど、まさかすぐに出会す何
てね……」

兎に角、今は周りの魔物を何とかしないとイケないかな？

ルシ「悪いけどそこを退いてくれないかな？」

『シャルルルル!!』

あゝ……無理っぽいね。仕方がないけど強引に行くしかないみた

い

ルシ「悪いけど私はこう見えて不器用だからね？手加減は出来ないよ？」

『シャアアアアア!!』

私が武器を構えると同時に魔物が威嚇をした

ルシ「… 碎破槍」！」

槍を思いつきりに振り上げ、地面を一直線に切り裂き亀裂を作る。その衝撃で魔物は吹っ飛んだ

ルシ「… 円陣槍」！」

円を描くように回転し、周りの魔物を切り裂いた

ルシ「取り敢えずは片付いたね？後はあのサソリ…… チェリーズパイクだけだ！」

あのデカイサソリの名前はチェリーズパイク。鋭利な爪や尻尾で攻撃してくるけど、注意して戦えば倒せないことはない

ルシ「確かこの辺りに……」

さつきはこの辺りにいたんだけどなあ…… ってまさか!?

『キシアアアアア!!』

ルシ「っ!? 危ない危ない……」

地面に潜って姿を隠すなんてせこい事するねえ……お前絶対忍者だろ……

『キシヤアアアア!!』

チェリーズパイクが尻尾で攻撃してきた

ルシ「〃飛天翔駆”！」

私は斜め後ろに跳び尻尾攻撃をかわしつつ槍を構え、対象目掛けて貫いた

ルシ「くっ……今ので倒れないか……流石はギガントモンスターだね」

『キシヤ…シヤアアア!!』

でもダメージはあるみたいだね。次で決めるよ!

ルシ「〃裂炎刃”！」

槍に炎を纏わせ、素早く二回切り裂いた

『キ…シヤアア…』

ルシ「ふう……何とか片付いたね」

チェリーズパイクの事も含めて報告しておこうかな?

くドヴォール

ジユ「あっ！ルシイが帰ってきたみたいだよ！」

もう皆帰ってきてたんだ。結構あっさり終わったのかな？

ルド「遅かったな？何やってたんだ？」

ルシ「ちよつと大きなサソリを倒してただけだよ」

エル「大きなサソリ!?いいなあ！エルも見たかったあ！」

ジユ「大丈夫だったの？」

ルシ「うん！ちゃんと陸ガニも採ってきたよ！」

ルド「後はルシイだけだ。早く納品してこい」

ルシ「りょーかーい！」

ついでにチェリーズパイクの方も忘れずに報告しないとね

ルシ「お兄さん！依頼品を納品しにきたよ！」

「お疲れ様ー！これが報酬だよー！」

ルシ「ありがとうー！あとエラール街道のでっかいサソリも退治しておいたよっ！」

「聞いてるよ。クランスピア社の情報網は甘くないからね？」

えっ？もう伝わってたの？流石はクランスピア社と言うべきか

……

「はい。これはその分の報酬だよ」

ルシ「こんなに貰えるの？」

「ギガントモンスターはかなり強力だからね？それ相応の報酬は用意させてもらつよ」

太っ腹な会社だねえ。でもこれだけあれば武器くらいは買えるかな？

「またギガントモンスターの依頼が出たら掲示板に貼っておくから、その時はお願いね？」

ルシ「任せて！」

さてと、ルドガー君達は驚くかなあ？

ルシ「お待ちせ！」

ルド「ああ……ってなんだその金!？」

ルシ「私がサソリを倒した分のお金だよ？ギガントモンスターを倒したら報酬を貰えるんだって！」

ジュ「なるほど。じゃあその分はルシィの分だね？」

ルシ「それなんだけど……これだけあるんだから皆武器を買い換え
た方がいいんじゃない？これからは敵も強くなるだろうし、準備はす
るに越したことはないよ？」

ジュ「えっ？いいの？」

ルシ「うん！だから皆で分けあおう！」

エル「エルにもなにか買って！」

ルシ「勿論いいよ」

エル「わーい！」

ルド「じゃあ、一通り買い物を済ませたらトリグラフに向かうか。
取り敢えず移動制限は解除されたしみたいだし」

ルシ「オツケー！」

こうして私たちは各々買い物をしたあと、トリグラフへと向かった

旅の前兆

「トリグラフ」

エル「ふう……やっとトリグラフついたー！」

ルシ「やっぱり大きい街だねえ！」

周りを見まわしてもビルばかりが建ち並んでいる。しかも黒匣（ジン）ばかりが使われているせいで精霊達は死に、マナがなくなり自然が全くと言っていいほどない

ジュ「あの一番大きなビルがクランスピア社だね？」

ルド「ああ。俺の兄さんも働いている所だ」

クランスピア社……通称クラン社。エレンピオスでは知らない人はいないとまで言われているほど大きな会社で、入社するのは非常に困難で、試験を無事乗り越えられ認められた者だけが入ることが出来る、いわばエリートである

ルシ（その裏では何を考えてるか分かったものじゃないけどね……）

ルド「俺の家はこっちだ」

私たちはルドガーに着いていき、いくつがあるアパートの内の一室に辿り着いた

ルド「この部屋だよ」

着いたのは“302”と書かれた部屋だった

ジユ「ここがルドガーの家？」

ルド「ああ。居候だけどな……」

エル「エルそれ知ってる！イソーローってニートのことでしょ！」

ルド「うぐっ!!？」

ルシ「ダメだよエルちゃん。ホントの事言っちゃあ」

ルド「ぐはあ!!？」

ジユ「……天然……なのかな？」

暫くルドガー君は落ち込んでいたが、すぐ立ち直り家の中へと案内してくれた

エル「ここがルドガーの家か……思ったより普通だね？」

ルド「……お前は一体俺に何を求めてるんだ？」

エル「うっん……愛と勇気？」

ルド「なんで!？」

エル「エルが見てたヒーローもののアニメのオープニングで、愛と勇気だけが友達って言ってたから」

ルド「知らねえよ!って言うかヒーローなのに友達が愛と勇気だ

けって悲しすぎだろ!？」

なんか謎の漫才やってる。これには思わずジュード君も苦笑いしてるし……

っていつか、ア パ マ ってこの世界でもやってるの？

ルシ「取り敢えず落ち着いた所でご飯にしない？私お腹減っちゃって……」

ルド「そ、そうだな。じゃあ、準備するからちょっと待っててくれ」

ルシ「手伝おうか？」

ルド「いや、ルシィは客だからくつろいでいいよ。俺一人で大丈夫だから」

ルシ「そう？じゃあ、お言葉に甘えさせて貰おうかな？」

ルド「君のご飯かぁ……一度食べてみたかったんだよねえ」

エル「あっ！エルトマト苦手!！」

そう言えば、エルちゃんってトマト嫌いだったね？私も昔は嫌いだったなあ……今は好きだけどね

ルド「好き嫌いするなよ。旨いぞっ」

エル「いいですよーだ！全く、どうして大人ってトマトが好きなんだろう」

子供はトマト嫌いな子が多いんだよねえ……

聞いた話では、トマトは昔毒があると言われてて、その時の本能が残っているから食べたくないらしい。そう考えると人間って奥が深いね？

ルド「取り敢えずスープを作るから待っていてくれ」

ジュ「分かったよ。悪いけどお願いね？」

ルド「大丈夫だ、問題ない」

……それはフラグだ

だが暫くしたらスープが完成した……フラグを壊された……だと？

ルド「お待たせ！俺の特製スープの完成だ！」

エル「なんかスゴイ！」

ルシ「これは本格的だね」

実物を見るとやっぱり凄い。高級レストランのスープ見たいな見た目だ。中は少し透けていて、真ん中には葉っぱが浮かんでいて高級感溢れている

ジュ「いただきます」

エル「ん〜 おいし〜」

ジュ「ルドガー！これプロ並だよー！」

ルド「ふふうん！」

そうだろう！と言わんばかりのドヤ顔を決めるルドガー君。確かにこれは言葉に出せないほどの味だ。舌にとろけるように流れ込み、香ばしい香りと、独特のスパイスを同時に味わうことが出来る。

……私じゃとても真似出来ないね

ビズ「邪魔するよ？ルドガー君」

私たちがルドガー君のスープを味わっていたら、ビズリーさんが入ってきた。社長なんだからノックくらいしまししょうよ……

ジュ「ビズリーさん!? 貴方も無事だったんですね？」

ビズ「私は……な」

ルド「？」

「トウッ！」

ルド「グアッ！」

ビズリーさんが意味深なことを言うと、上から何者かが飛んできてルドガー君を蹴り飛ばした。それにしても相変わらずの登場の仕方だね

ジュ「君は!？」

「驚いてる暇が!……っあるよっだな」

ジュ「イバル……」

イバルと呼ばれた人はジュード君に押さえつけられた。流石医学者（物理）

ビズ「はっはっは！面白いな、イバル君。これから君を雑務エージェントとして雇おう」

イバ「……ありがとうございます」

ルシ「それで本題は何ですか？」

正直私はルドガー君の特製スープを呑みたいのだけれど……

ビズ「おっと失礼。ではヴェル君」

ヴェ「はい。まずはこちらをご覧ください」

そうやってヴェルさんがTVをつけた。て言うか何でタイミング良くニュースがやってるの？

ニュースの内容は、自然工場アスコルドに追突した列車のテロ事件に関するものだった。ルドガー君お兄さん……ユリウス・ウィル・クルスニクが全国に指名手配され、ルドガー君も重要参考人として指名手配されたと言う内容だ。なんとと言う不幸体質……

エル「エルもルドガーも関係ないってば！」

ビズ「身内が偶々同じ時間、同じ車両に乗り合わせていた……これを信じると？」

エル「信じてよー！」

普通の人は信じるわけないんだよねー……

ルシ「……………それを伝えるためだけに来たわけでは無いんですよ？」

ビス「勿論用件は別にある。ルドガー君にユリウスを捕まえてほしい」

ルド「なっ!？」

ジユ「ユリウスさんは生きていますか!？」

ビス「奴はあのくらいで死ぬたまじゃない。もし捕まえるのであれば警察どもは私たちの手で抑えよう」

ルシ「選択の余地無し……………だね？」

ルド「くっ……………分かった。兄さんを捕まえる……………」

ルドガー君はユリウスさんを捕まえる道を選んだ。兄弟で争わなければならぬなんて複雑だね……………

ビス「迷いが無いな。良い判断だ」

ジユ「ルドガー……………」

エル「またお金ないとダメかも……………」

ルド「そう……………だな……………」

ビズ「……結果を出さずに報酬を求める。ユリウスは君をそんな風に育てたのか？」

ルド「くっ!？」

ビズ「……さんはそう言い残すと、足早にこの場から去っていった」

ジュ「ルドガー……本当にこれで良かったの？」

ルド「……他に方法が無いから仕方無いさ」

ジュ「……………」

ルシ「私たちも力になるから、一緒に頑張ろう」

ルド「ああ、ありがとう」

こうして私たちの本当の冒険が始まった……………

ヘリオボーグ研究所

ユリウスさんを探す旅に出ようと決意した私たちは、一時的な借金を返し終え、現在移動制限が解除された場所へと向かっている。その場所は……

「ヘリオボーグ研究所ってどんな所なんだ？」

ヘリオボーグ研究所だ。ノヴァさんは研究所かマクスバードのどっちにするか聞いてきたんだけど、ルドガー君がヘリオボーグを解放して欲しいって言ったからこっちになった。

まあ、どちらにせよ両方行くんだけどね？

「ヘリオボーグ研究所は僕が源霊匣（オリジン）を研究するために一緒に活動させて貰ってる場所なんだ」

「因みに少し前までは軍事関連や黒匣を研究する場所だったんだよ」
「？」

「ルシィ物知りだねー！」

「まあね」

攻略本からの知識だけどね？ by 主

「っと、言ってるそばから着いたよ？」

あれがヘリオボーグか……。予想よりも大きいなあ

「ん？何か騒がしくないか？」

「本当だ。何かあったのかな？」

「取り敢えず聞いてみようよ！」

私たちは近くの研究員に事情を聞いてみることにした

「か、関係者以外は入らないで！」

「何があったの？」

「あっ！ジュード博士！実は突然アルクノア達が攻めてきて……」

「アルクノア！」

アルクノア……全く、いつになっても懲りないね

「駄目だ。俺一人だけじゃどうしようも……!？」

「なっ!?アルヴィン！」

「っと、コイツはまた良いタイミングで……」

「どうしたの？こんなところだ」

「アルクノアが暴動を起こしてるって聞いてな。そっちの奴らは仲間か？」

「ああ、俺はルドガー・ウィル・クルスニク。よろしく」

「エルはエル！そしてこの子はルル！」

「ナア〜」

「私はルシエル・ティルス！ヨロシクね」

「こっちこそ」

アルヴィンは私たちの紹介に対して軽く頷く

「ルドガー、これはアルクノアのテロだ。俺、元アルクノアなんだけど……信用してくれるのか？」

「!?!……信用するよ」

ルドガー君は少し驚いた顔をしたが、直ぐに信頼の眼差しを向けた

「……成る程、ジュードの友達って感じだな」

「アルヴィンはジュードの友達じゃないの？」

「ん？……どうかな？」

前作では色々とおれだったからね……アルヴィンは……

「ふふ、友達だよ」

ジュード君が苦笑いしながら答える

「なんか信用出来なそう……」

「子供の目は誤魔化せないな……」

「大丈夫だよ！裏切ったら私が斬るから」

「あつ！それなら安心だね！」

「サラッと怖いこと言うなよ！」

今のアルヴィンなら大丈夫だと思うけどね？

「と、兎に角先へ進もう……」

ルドガー君が少し引き気味で言う。私たちはそれに頷くと奥へと進んだ

「けんきゅーじよって広いんだねー！」

エルちゃんが驚いたように言う

「驚くのは良いけどエルちゃんは下がっててね？」

「うん！分かった！」

「……すっかり囲まれたみたいだな」

「そうだね。早いところ片付けよう！」

！
ジュード君気合い入ってるね。じゃあ私も少し本気出そうかな

「我々は屈しない！リーゼ・マクシアなんかに！」

？
まうだ拘ってるんだね。いい加減にしないと嫌われちゃうよ

「お前達全員生かしては帰さないぞ！」

数で攻めれば勝てると思ってるのかな？

そう考えているとアルクノア兵の一人がマシンガンの様な物を連射してきた

「遅いっ！」

「何っ!？」

気が付いたときにはジュード君は兵士の後ろに回り込んだ。いつ見ても集中回避はチートだね？

「連牙弾」！

ジュード君は前進しつつ素早い5連撃を繰り出す

「ぐはっ！」

「烈風拳」！」

続いて自身が回転し風を巻き起こして相手とともに上昇する

「おちろー！ 鳳墜拳」！」

トドメとも言わんばかりに降り下ろした拳から炎の衝撃波を放った。キレイに決まったコンボだったね。

「っ!? やはりリーゼ・マクシア人は化け物だ！ こうなったら！」

ジュード君には敵わないと悟ったのか、私たちに銃口を向けてきた

「エレンピオスの裏切り者たちでも始末してやる！」

「って言うてるけどどうするよ？ ルドガー君、ルシィ」

「うーん……取り敢えずは抵抗するかな？」

「だな。どうせ倒さないと先に進ませてもらえなさそうだしな」

「了解した！」

アルヴィンは私たちの意見に同意し、大剣と拳銃を取り出した

「我々をナメるな！」

激昂した兵士の数人がアルヴィン目掛けて走り出した

「よっしゃー！ じゃあ一気に溜め込んで！」

アルヴィンは力を溜める素振りを見せる

「チエイスキヤノン」！

少し飛び上がって闇の力を纏った銃弾を3発放つ。それは兵士達にあたりいとも簡単には倒れ込んだ

「シュートってね？」

アルヴィンは拳銃を軽く回しポーズを決める。キザなポーズを決めるあたりがやっぱりアルヴィンらしい

「迅」！

ルドガー君は双剣を正面に突きだし敵を一刺しする

「紅蓮翔舞」！

もう一人の接近してきた敵に対して、サマーソルトで蹴り上げたあと、炎を纏った双剣で斬りつけた

「轟臥衝」！

落下する勢いを利用して下にいる兵士に向かい、剣を回転させながら地面に剣を突き立てる

「くっっー」「イシは強いぞー」

「まだだ！まだ女が残っている！」

あつ、仲間達の戦いを冷静に分析してる場合じゃなかった……

「って、いつの間にか囲まれてるし……」

「覚悟しろよ、女！」

ムカツ

「女って何よ！私にはルシエルって名前があるんだからね！」

「構うな！やれー！」

全く、人の話を聞かない人ばかりじゃん！

「そんな人たちには！」

私は回りから無謀にも突っ込んで来た人達の頭上へと飛び上がった

「お仕置きしてあげる！」

闇の力を右手に集中させる

「貫け！」「デモンズランス！」

出来上がった禍々しい槍を真下に投合して敵を一掃した

「ヨイシヨいっと。こんなもんかな？」

私は一息ついた事に一安心し汗を拭う

「スゴいなルシィ……あんなこと出来るなんてな」

アルヴィンが私に称賛の声をあげる

「フフン、まあね」

因みに今のはリオンさんの技であってナハティガルさんの鬼畜奥義じゃないからね？

「それにしても相手も容赦無く撃つてくれるよなあ。こっちにももつと飛び道具が欲しいものだが……」

アルヴィンが不満の声をあげていると……

スタツ

「ふっ、良いところに来てしまったようだな！」

「イバル！」

「……相変わらず神出鬼没な巫さんだな」

「あっ！あの時の変な人だ！」

エルちゃん……変な人は可哀想だよ

「ご挨拶だな。早速新兵器を持ってきてやったと言うのに！」

イバルは2丁の拳銃を懐から取り出しクロスさせポーズを決める。

しかし……

「っ!? あっぶねえ……」

……何故か誤射された。これには堪らず皆呆れた顔をする

「……見ての通り危険な武器だ。使い方には十分に注意しろ」

「あ、ああ。分かった」

ルドガー君は苦笑いをしながら双銃を受け取る

「使い方は？」

「大丈夫だよ。大体分かる」

「そうか。なら俺の目的は達成したから帰らせて貰う！」

イバルはそう言い残すと颯爽と駆け抜け消えていった

「こつゆつ時は速いんだね？」

「ははは……」

私が色んな意味で感心するとジュード君は少し苦笑いをした

「兎に角銃も手に入ったし、前に進もう」

ルドガー君はそう言うと、双銃を仕舞った。皆もルドガー君の言葉に頷くと奥を目指し進んでいった